



クラブづくりは 人づくり

横濱ラグビーアカデミー 春口 廣

この10年間で五度の優勝を果たし、9年連続で決勝へと進出している。大学ラグビーの雄・関東学院大学を率いて32年の春口氏が、大学のある神奈川県横浜市で3年前に立ち上げた横濱ラグビーアカデミー。大学王者とはまた異なる「クラブ」での指導、目的は何か。春口氏を取材した。

苦労があるから美しい

雨の季節に木々の新緑が映えるように、青々とした芝生のグラウンドも小雨のなかで美しく際立つ。9年連続で大学選手権決勝進出を果たし続けている関東学院大学と、神奈川県大学の試合をスタンドから見守りながら、関東学院大学ラグビー部を率いて32年目を迎えた監督・春口氏が、ひと言つぶやく。

「ラグビーは常にボールが先頭にあるよね。だから美しいんだろうな。ボールをつなげる苦労があるから、その美しさが際立つんだよ」

チームを9年連続大学選手権決勝に導いているだけでなく、卒業生の多くをトップリーグに輩出している。「名門」であり「名将」、そう呼ばれても少しも違和感はない。しかし春口氏はこう言う。

「うちなんてまだまだ、やることだらけ。つくりあげなければいけないことばかりよ」

芝のグラウンドを維持したい

大学選手権で五度目の優勝を飾った2003年9月、関東学院大学のグラウンドを活動拠点とする「横濱ラグビーアカデミー」を設立した。ラグビーを通して子どもたちに運動の場を提供することで、スポーツの楽しさやチームワークの大切さを伝えていきたいという目的とともに、アカ

デミー設立に至った理由がある。

「立派な芝生のグラウンドを維持していくために、より多くの人にこのグラウンドの素晴らしさや意味を理解してほしい」

関東学院大学がある横浜市金沢区釜利谷周辺は、駅からはバスを利用しなければならず、交通の便に優れた場所とは言い難い。そのため学生の多くが駅からのバスや自転車、バイクを利用して通学している。学生側からすれば「当たり前」のこともかもしれないが、大学に通っているわけではない地域住民からしてみれば始点（駅）から終点（大学）まで、授業の時間に合わせては、乗り切れないほど多くの学生がバスを占拠しているということ。「乗りにくい」と苦情が寄せられることもある。

グラウンドも同じ。芝のグラウンドではなく砂のグラウンドから舞う砂埃に対しても近辺住民からの苦情があれば、いくら練習に必要な環境だからといって保持し続けることが

難しくなってしまう。

「公害ならぬ“校害”。地域の人たちの理解をいかに得るか。これからの大学やスポーツ界は、そういうことを考えていかなければいけないよね」

芝の状態を良好に保つためには、ラグビー部員だけに限った利用としたほうがいいのかもかもしれない。でもそれでは他にに向けた還元にはならない。「そんな状態で練習しているだけでは、応援してもらえるチームになどなれない」。

ノーサイドの精神

グラウンドや体育館を開放し、試合に出場する選手たちも含めた大学生たちが、近隣住民や子どもたちに対して直接指導にあたる。子どもたちからしてみれば、大学日本一に輝くようなヒーローと触れ合うことができるだけでなく、そのトップの選手たちが利用するグラウンドが自分たちにとっても「ホームグラウンド」

■横濱ラグビーアカデミー

活動拠点：横浜市金沢区
 実施スポーツ：ラグビー、タグラグビー
 年会費：パートナーメンバー（企業、法人、グループ）1口100,000円、サポートメンバー（個人）5,000円
 練習日：土、日 原則的には各10時～12時
 スタッフ：理事長・春口廣、コーチ・ア

カデミースタッフ、関東学院大学ラグビー部員
 指導方針：芝生のグラウンドを提供し、チームワークの大切さやフェアプレーの精神を子どもたちに伝え、感動や喜びを共有できる笑顔の絶えない子どもたちの育成に努める
 URL：http://www.yokohama-rugby.ac/

になる。コーチ役の大学生も、子どもたちへの指導、「教える」という作業を通して基本的な考えを再確認する機会につながる。

大学を母体にしたクラブを立ち上げるといって、どうしてもOBやOGが中心となりがちである。しかしそこに「地域」や未来ある「子どもたち」を取り入れることで、アカデミーという組織として根づいていく。「ここにいる子どもたちが全員ラグビーを続けなくてもいいし、続けていてもウチに来なくなってもいい。ただ『芝生の上でプレーするって気持ちいいな』と思った気持ちを覚えていてほしい。それだけです」

グラウンドを開放するのは、アカデミーに属する子どもたちやクラブに限ったことではない。近隣で活動する高校のラグビー部にも、春口氏は積極的にグラウンドを提供している。そして彼らに対してこんな言葉をかける。

「どうだ、芝生のグラウンドは楽しかったか？ お前らもいつかは俺の敵になるなあ」

進学校として名を馳せるその高校



大学と地域の連携による新たなクラブづくりを目指す春口氏

からは、毎年何人かの選手が早稲田や慶応に進み、ラグビー部に入る。だからこそ出てくる「敵になるなあ」という言葉。しかも春口氏はそれを喜びとして彼らに伝える。

「このグラウンドでやったラグビーが楽しかったらそれでいいでしょ。一緒にやった仲間であることは変わらないから。敵味方なんて関係ない。まさに“ノーサイド”だよな」

試合終了の笛が鳴り、迎えるノーサイド。その瞬間、敵も味方もなく、ともに戦った仲間として、互いを称え合う。大切なのはどちらが勝った

かではなく、そこまでの道のりをどうやって進んできたのか。

「(アカデミーがあることで)1人でも仲間が増えてくれれば嬉しい。それがすべてですよ」

愛されるチームになるために

とはいえ、アカデミーを設立する道のりは容易なものではなかった。同年に設立されたワセダクラブ(早稲田大学による従来の枠組みにとられない新しいスポーツクラブ形態 ※詳細は<http://www.wasedaclub.com/>参照)は、伝統と多くの卒業

■「まずは楽しくラグビーを！」～釜利谷クラブの活動から～

横浜ラグビーアカデミーを応援する団体は3つある。1つが春口氏が監督を務める関東学院大学ラグビー部、そしてもう1つは「タグラグビー」。さらにもう1つが、幼稚園生から中学生までを対象にしたジュニアチームと、大学を卒業した選手や40代、50代など幅広い世代がラグビーを楽しむためのシニアチームから構成される「釜利谷クラブ」。

関東学院大学の選手たちが実際に日々の鍛錬に励む、芝生のグラウンドを同じように“本拠地”にする釜利谷クラブ。活動時間である土曜の午前中には、約120人の子どもたちが「タグラグビー」を楽しむために、関東学院大学のグラウンドへと集まる。

基本ルールはラグビーに準じ、タックルの代わりに腰につけた2本のリボン(タグ)

を取り合うタグラグビーに興ずる釜利谷クラブの子どもたち。やや女子選手優勢の比率で活動する同クラブで指導にあたる平野剛志氏は、クラブの活動を「単純明快に、誰もが楽しめるラグビー」と総括する。

一般的に「痛い、きつい、汚い」いわゆる「3K」のイメージを持たれがちなラグビーを、より早い年代から安全に楽しむための手段として考案されたタグラグビー。横浜市では体育の授業の一環として取り入れられるなど「誰もが楽しめるスポーツ」として、一種の“市民権”を得つつある。

タグラグビーのルールは大きく分ければ以下の4つ。「(ボールを)落とさない」、「(ボールを)前に投げない」、「パスカットをしない(オフサイド)」、「相手を倒さない」。ごくシンプルな決まりごとのもとで

タグラグビーを楽しむ子どもたちに対し、関東学院大学のラグビー部員たちもラグビーの楽しさを伝えるためコーチとして一役を担う。

9年連続で大学選手権決勝に進出した超一流から受ける指導とはいえ、子どもたちにとってはあくまでも「ラグビーがうまいお兄ちゃんたち」。同大を卒業して現在もトップリーグで活躍する選手たちも含め、多くの“一流”選手たちのサインが記されたユニフォームを身に纏いタグラグビーを楽しむ。「これからも釜利谷クラブから、横浜からタグラグビーの楽しさを発信していきたい」(平野氏)という言葉が、現実の形として現れていく日はそう遠くなさそうだ。



これからのラグビー界、スポーツ界を見据えて活動する横濱ラグビーアカデミーでは子どもたちの笑顔があふれている

生からなる組織をすでに持ち得る。ラグビー部のここ10年の成績だけを見れば、早稲田と関東学院は大学ラグビー界の両雄と言っても過言ではない。しかし「クラブ」「アカデミー」となれば話はまた違う。同じだけの組織を、同じ時間で展開することは不可能に近い。春口氏は言う。「コツコツやることですよ。慌てる必要ない。まずは早稲田や慶応のように、いつまでも可愛がってもらえるチームにならなきゃね」

今年1月、早稲田大学との大学選手権決勝。昨年のリベンジを果たすために臨んだ一戦は41-5で早稲田が勝利し、連覇を達成した。歓喜に沸く早稲田フィフティーンをスタンドの応援団は拍手で迎え、赤と黒の旗を振る。敗れた悔しさを噛みしめながらも、春口氏は悔しさを上回る大きな喜びと、ある種の感動を抱いていた。

「ウチが勝ったときはね、試合が終わると同時にお客さんが半分くらい帰っちゃったんだよね。でも、今年の決勝は、最後の最後まで観衆がいなくなるなんてなかった。見に来てくれた全員が優勝した早稲田と、その相手として戦ったウチを称えてくれた。ありがたかったし、嬉しかったですね。こんなふうに応援してくれる人たちに対して、もっと積極的に出て行かなければいけないと学ばされましたよ」

大切なのは続けていくこと

勝つことはもちろん大切なことだ。春口氏も「ある程度の結果を残さなければ、いくらやりたいことがあっても実現させていくのはなかなか難しい」と言う。

しかしそれと同じくらい、いや、それ以上に大切なことがあると春口氏は言う。それは何か。

「いつまでも続けていくこと。アマチュアスポーツに引退はないし、選手だって、どんなレベルでも続けてくればそれでいい」

選手に限ったことではない。大学も同じなのだと言っている。「関東学院っていう強いチームがあったね、と言われるようじゃダメ。いつまでも強いチームでい続けるためには、見るべきところは競技力を上げることだけじゃない。それも含めて、これからの形、クラブをつくっていくことが大切なんです」

ラグビーという1つのスポーツに限らず、とくに子どもたちには多くの選択肢があったほうがいいのかと春口氏は言う。何が向いているのかという適性は容易にわかるようなものではない。いくつもの興味のなかから、少しずつ自分で選んでいけばいい。そう考える。

幼少期にラグビーを体験していれば、対人スポーツを通して身体の使い方や動き方を自然と学び、団体スポーツを通して相手を思いやりたり、

人との付き合い方を学ぶ。そこを入り口にしてバスケットボールやサッカーなど、ラグビーではない競技を選択しても構わない。

「どれだけ優勝したということは、あまり誇りじゃないんですよ。それよりも、ここから育っていった選手たちが、1人でも多く、自分の選択した競技を続けられる喜びを感じてくれるほうがずっと嬉しい」

大学とトップクラブの連携

さらにもう1つ、アカデミーには新たな試みがある。今年6月からは横浜市を本拠地として活動する横浜F・マリノスとの提携事業がスタートしていくそうだ。

トップチームはJリーグに属し、下部組織であるユースやジュニアユースなど幼少期から横浜市や横浜須賀野市で地域に根づいたサッカークラブを展開している横浜F・マリノス。ここに横濱ラグビーアカデミーが加わることによって、サッカーだけでなくラグビーやラグビーもあり、高校卒業後は関東学院大学で学び、トップへとつなげていく環境が新たにできる。「君はサッカークラブから入ってきたから、ずっとサッカーね」と競技を限ることもなく、ラグビーがやってみたいと思えばいつでもラグビーができる環境をつくる。そしていつかは、マリノスのサッカーと同様に、ラグビーもマリノスと

名のつくようなトップチームをつくる
ることができたら――。

「大学はサテライトでいい。でもなくなったら絶対にダメ。そこでしかできないことがあるからね。大学の先にトップクラブがあれば、選手権で燃え尽きて、先を目指さないなんということもなくなるはずでしょ。子どもからトップまで、そういうクラブをつくりたい」

子どもから大人まで、誰もが参加することのできるクラブと、同じ世代の“学生”が集まっている集団である大学。いくら近くで活動していても、互いが交わって同じ組織として活動することは、これまでの日本ではあまりみられなかったスタイルと言えるだろう。しかし、春口氏は言う。

「大学という1つのくくりではなくて、ラグビーという大きな集まり、さらにはスポーツというもっと大きな和でくくりたい」

ともに喜び、悲しみ、苦しみ、何かを目指す。そのなかで大切な何かを経験し、学んでいく。そのすべてが仲間づくりであり、人づくり。それが叶うのがクラブという形態なのではないか。

もしもトップチームができたら、やはりそのクラブを「監督」として率いていくのだろうか。

「俺はここ(大学)でいい。先生だからね。トップはトップを経験した奴らが引っ張っていけばいいんだよ」

大人と子どもの境界線

メイングラウンドでは大学生たちが試合をして、その横のサブグラウンドでは学生たちの指導を受けながら“生涯学習”のラグビー教室に参加する中学生の女の子や、大人たちがボールを追いかけて、芝生の上を駆け回る。雨が降り始めてしまったた

めに外での活動がお預けになってしまった子どもたちは、グラウンドに隣接する体育館のなかで、同じように学生部員たちと一緒にタグラグビーをしたり、ボール遊びをして同じ時間を過ごす。

そんな光景をみながら、春口氏も嬉しそうに微笑む。

「女の子たちも上手な子が多いからね。あの子たちがこれからも続けられる環境もつくらなきゃ。やることがいっぱいあるなあ」

クラブも大学生に対しても、「指導」という面においては変わらぬ軸が春口氏にはあると言う。

「子どもたちの指導は、7割は誉めて、叱るのは3割だけ。『何だそれは』って怒るんじゃないって、『よくできた』って言ってあげないと。これがなかなか難しいんだけどね」

目を細めながら、少し笑みを浮かべて話す春口氏に聞いた。

「いつ頃までの子たちが春口さんにとって“子ども”ですか?」

少しの時間も空けずに、春口氏は言った。

「小学生や中学生だけじゃないよ。大学生も子ども。箕内(拓郎、現・NECグリーンロケッツ所属。関東学院大学出身。大学4年時にはキャプテンを務め、大学選手権初優勝)だって子どもだよ」

大学選手権で何年も連続して決勝に出続けている学生たちどころか、全日本でキャプテンを務めた箕内選手すら「子ども」と評する。では逆に、どこから「大人」になるのか。今度は少しの沈黙の後、こう言った。「清宮(克幸、現・サントリーサンゴリアス監督。今年の日本選手権まで早稲田大学監督)かな。彼は俺を乗り越えていったからね。そうなればもう大人だし、尊敬できる指導者ですよ」

自分を越えていく姿をみられることが、指導者冥利に尽きる喜び。春口“先生”は、これからの指導者たちに大きな期待を込めて、これからもきっと、変わらず温かく見守っていく。

「勝つことは大事。でももっと大事なものは続けること。だからこれからは、どうしたら続けていくことができるか、もっともっと広い視野から考えてつくっていききたい」

これまでの32年間と同じように、また1つずつ積み木を積み上げる。大学からクラブへ。形態は違っててもやっていることは変わらない。

「クラブも指導者も仕事は同じ。人づくり。これに尽きますよ」

また一歩ずつ、新たな道が刻まれていく。

(取材・文/田中夕子)

■連載終了にあたり

20回にわたり取り上げてきたさまざまな「クラブ」。これまでは当たり前のように存在していた企業スポーツが縮小の一途をたどり、学校スポーツもさまざまな変化を余儀なくされている。

これからのスポーツ界を描いたとき、どんな場が求められ、そこにはどんな指導者が必要なのか。そして「クラブ」の指導者にとって得られる結果、価値は何か。それがこの連載のテーマだったように思える。

「続けていくこと。クラブづくりも指導者も同じ、やることは人づくり」という春口さんの言葉や、「結果がみえないから試行錯誤を続ける」という和賀さん(本誌2006年6月号)の言葉はとても印象的だった。

今後のスポーツ界の大きなカギを握る「クラブ」での指導からのヒントが、さまざまな現場での指導に活かされていますように。